

# 『ミヘルス研究の現状』

氏 家 伸 一

1. ロベルト・ミヘルス (1876—1936) は、「組織について語ることはオリゲーキーについて語ることである」という「オリゲーキー (寡頭制) の鉄則」命題で一躍古典的価値を獲得した名著『政党の社会学』(1911) の著者である。オストロゴルスキー (1854—1919, 『民主主義と政党の組織』, 1902) やマックス・ウェーバーと並んで政治社会学ないし政党社会学の創始者といわれている<sup>(1)</sup>。しかし彼の主著『政党の社会学』についてジグマンド・ノイマンは「現代の政治社会学の研究を完全に方向づけている, 疑い無き模範書」と評価しつつも, 「しばしば言及され, 引用されながら, ほとんど通読されることがないという不幸な運命をもった」と語っている<sup>(2)</sup>。古典的な主著についてさえそうなのだから, いわんやミヘルスの思想を全体的・総合的に研究する試みは1970年代まではほとんど無かったといっても過言ではない。

わが国でのミヘルス研究については, 1913年に『政党の社会学』が翻訳されたにもかかわらず<sup>(3)</sup>, また「寡頭制の鉄則」に言及されることが少なくないにもかかわらずほとんどみられなかった<sup>(4)</sup>。

戦後主著『政党の社会学』が再発行されたのはドイツ語版が1957年 (序文・ヴェルナー・コンツェ), イタリア語版が1966年 (序文・リンズ), 英語版が1962年 (序文・S.M.リプセット), フランス語版が1971年 (序文・ルネ・レモン)<sup>(5)</sup> である。これら序文の中でも特にリンズの長大な序文はその後の研究に大きな刺激を与えたといえる。続けてレーリッヒ, ミッツマン, ビーサム, フェラーリスなどが陸續と本格的なミヘルス研究を発表した。それに呼応するかのよう<sup>(6)</sup>にわが国でも1973年以来

『政党の社会学』が別個に相次いで再邦訳された<sup>(7)</sup>。それぞれの訳者あとがきはまた先の研究書を一部利用しながらミヘルスの思想発展を跡づけ、<sup>(8)</sup> 恰好のミヘルス研究入門を提供してくれている。

本格的なミヘルス思想の研究の開始に触発されるかのように、最近3冊<sup>(9)</sup>のミヘルス・アンソロジーとミヘルス研究論文集が出版された。前者（イタリア語で2冊、ドイツ語で1冊）によって主著以外のミヘルスの重要な論文にも容易に接触できるようになったといえる。後者については1983年がミヘルス没後50年目にあたったのが機縁をなしているようである。では何故この20年間の間にミヘルス研究が活発になったのか、言い換えれば、何故それまで無視に近い状況だったのか。この問題はミヘルス自身の思想発展ともかかわっている。

2. レーリヒやビーサムの著作のタイトルも示唆しているように、ミヘルスは革命的サンディカリストとして出発し後にイタリアに帰化、そしてついにはムッソリーニのファシズムを支持するようになったという「伝説」的事実は確かに存在する。＜革命的サンディカリズムからファシズムへ＞といういわゆる＜転向＞問題はファシズムのイデオロギー研究の中でも興味深いテーマの一つではある<sup>(10)</sup>。しかし、「サンディカリズムのグループの全員が国家主義に転ずる。つまり国家主義者党は起源からいえばむしろ旧サンディカリストの知識人から構成される（モニチェッリ、フォルジェス、ダヴァンツァーティ、マラヴィア）」<sup>(11)</sup>というグラムシの言葉も示すように、正統マルクス主義者にとってミヘルスはいわばいかかわしいプチブル知識人の一員であった。『政党の社会学』は「純科学的」に、「左派民主主義政党と社会主義政党の生体」を「解剖台にのせ」た<sup>(12)</sup>にもかかわらず、というより、まさにそれゆえにドイツ社会民主党系の理論家の注目をほとんど引かなかった<sup>(13)</sup>。その後もマルクス主義者のミヘルス評価は概ね低かった。優れた西欧マルクス主義者のG.ルカーチは『政党の社会学』の書評でミヘルスの反唯物論的方法を批判している。「ミヘルスの社会学的分析が正しいとするなら、人はマルクス

## 『ミヘルス研究の現状』

の経済学の論駁に精を出す必要は全くないことになる。」社会学の法則は「マルクスの革命的ワインにたっぷり水を注ぐ」ことに努める。大衆心理学と社会学を土台にした無時間の本質、「鉄則」は現実分析には全然不十分である、と。グラムシも「ミヘルスの政党についての考察は、原資料と経験的で雑然とした記録としては面白いものである」と認めつつ、「彼は事実に対する本来的な方法論をもっていない」と指摘している<sup>(14)</sup>。

要するに、ミヘルスは「ブルジョア教授」<sup>(15)</sup>（レーニン）なのであり、この「幻滅した社会主義者」<sup>(16)</sup>（リンス）に対するマルクス主義者による否定的評価はその後の左翼陣営におけるミヘルスのイデオロギー的位置づけを規定したといえる。

ところでイタリアでは1960年代に、イタリアの社会主義運動と労働運動研究においてミヘルスの再評価が始まったといわれている<sup>(17)</sup>。わが国でも1970年代にそれが認められ初め、1970年に出版された『講座マルクス主義、3、マルクス主義思想史』（日本評論社）で、水田洋は『『政党の社会学』の著者として有名なミヘルスが、イタリア・マルクス主義の思想史的研究の先駆者であること』<sup>(18)</sup>に触れている。

1989年に出された研究論文集『ロベルト・ミヘルス—経済学・社会学・政治学』で編者のファウッチは、「近年ミヘルスについて書かれることが多くなった、しかも好意的に」と述べ、その背景をこう説明している<sup>(19)</sup>。(1) 先ず、高度資本主義における民主主義の危機があげられる。ミヘルスの研究した「同意形成のメカニズムの危機的要素のいくつかが、今日の民主的な政治生活に出現してきた」からである。(2) この論文集のタイトルも暗示するように、ミヘルスの関心領域は多面にわたっていたことは事実である。そして伝統的な学問体系の境界が非常に曖昧になり、むしろいわゆる学際的領域が人気を集めている現在、「ミヘルスという社会学・経済学・歴史学のはざまにあるインテリ<sup>(20)</sup>の経験」が今日の重要性を帯びてきたというのである。因みにこの論文集にはフェッラー

リスの「ロベルト・ミヘルスの政治的發展における女性問題と性道徳」という注目すべき論文も含まれている。ミヘルスのフェミニズム研究はほとんど知られていない。ともあれ「今世紀のイタリアとヨーロッパにおける観念のパノラマの中でも最もユニークな人物」に光が当てられ始めたのである。(3) リペーレは論文「現代におけるロベルト・ミヘルス」において、「ミヘルスは私だ」という結論に達したと、いささか衝撃的な命題を提出した。<sup>(20)</sup> 彼は「幻滅した社会主義者・民主主義者ミヘルス」というテーゼは1968年世代（当時二十歳の世代）の幻滅と共通していると指摘している。ただ幻滅 *delusione* よりは覚醒 *disillusione* の視点からの方が適切にミヘルスを理解できると主張した。加えてリペーレは「共産党とレーニン主義の最も明快で鋭い批判は、結果論的だが、ミヘルスに由来する批判にある」と述べている。<sup>(21)</sup> 今日思想状況に照らしてみても極めて現代的な意味をミヘルスは帯び始めていると言えるのである。

3. 「ミヘルスは、マックス・ウェーバーの親友、ドイツ社会民主党員であったが、そのためにドイツの学会および家族から受け入れられず、イタリア、スイス、アメリカの大学で教えたのち、ムッソリーニの支持者として、ペルーシアの大学の教授になった。<sup>(22)</sup>」これがわが国での一般的ミヘルス像であったといってよい。水田によるヒューズの記述の要約だが、2点付け加えておこう。ミヘルスはイタリア社会党員でもあったこと、またヒューズの言葉を借りれば「愛する」イタリアに帰化したこと、である。<sup>(23)</sup> ファシスト＝ミヘルス説はヒューズも認めている。彼はモスカ、パレート、ミヘルスら「ネオ・マキアヴェリアン」たちは、「20世紀初頭のデモクラシーの墓掘人」として、「反議会主義的雰囲気醸成に貢献し、その雰囲気が結果的にはムッソリーニを利することになった」と述べ、ミヘルスについてはこう語っている。「ミヘルスは極めて容易にファシズム体制に適應したのであり、彼の後期の著作は、紛うかたなく尊敬の調子をもってムッソリーニの統治について言及しているの

## 『ミヘルス研究の現状』

である。<sup>(24)</sup>」

さてこのような一見余りに激しい思想的転変はどう説明されるのか。それは単なる変節、無節操なのか。あるいはそこには一貫したものがあつたのだろうか。ミヘルスの政治思想の全体にとって恐らく最も興味深い問題である。本稿はこの問題に関するこれまでの研究を簡単に整理し、ついで現在の新しいミヘルス研究を紹介することを目的とする。

(A) 先ず、この問題に先鞭をつけたのは何といつてもリンスであろう。特に『社会科学の国際エンサイクロペディア』(1968年)に書いた「ミヘルス」の項目は簡潔にそれをまとめてくれた。先ず、ミヘルスの社会主義運動の研究は彼自身の党内体験がベースになっていることに注目する。これはよく知られた事実である。「しかし、彼のコミットメントは単に知的な関心からのみ動機づけられていたのではない。それは彼の情熱・行動・青春・結果を問わない原則・そして象徴的ふるまいへの偏愛と関係している。事実彼の初期のスタンス——彼の主意主義的な世界観への知的発展——は、後のファシズムとの親近性の基礎であつた。彼の政治生活は、もし『政党の社会学』を失望した民主主義者と幻滅したドイツ社会民主党員の仕事としてのみ読むなら連続性と一貫性に欠けているように見える。実際は、サンディカリスト＝ミヘルスの生涯の方が、純粹にマルクス主義的な社会主義者＝ミヘルスの生涯よりも納得いくのである。……彼の生涯は、挫折したロマン主義的な政治家、帰化した国の愛国者そして学究の生涯であつた。それは、何人か他にもいるが、忠誠の相剋と20世紀初頭の知的環境を反映しているのである。<sup>(26)</sup>」これはその後の本格的ミヘルス研究に一石を投じた文章であつた。

(B) レーリヒ、ミッツマンはほぼ同時期に〈幻滅した社会主義者〉＝ミヘルス<sup>(27)</sup>の思想的、心理的初期条件を基軸にすえてミヘルスの転向を説明した。レーリヒによる概観は次のようになる。

「互いに交替し、重複し、互いに浸透した発展諸傾向が社会主義とサンディカリズムからイタリア民族主義とファシズムへ——同時に革命的

階級論からエリート論へ——と至る、生涯にわたる彼の仕事を貫いていた。それらは<ブルジョア背教者>ミヘルスの始原的な革命的・社会主義的理想主義と、彼の宣伝したサンディカリズム的な直接行動と、かつての国際主義者がイタリアには承認した民族主義とに現れる。それらはまた、サンディカリズムと民族主義の理念の結合、ならびに、カリスマの指導者によって操作された同意のファシズムにおける民族主義によるイデオロギー的正当化に示される。<sup>(28)</sup>レーリヒは青年ミヘルスのイタリア社会主義への思い入れに先ず注目する。即ち、ミヘルスは「ここイタリアで、回顧的に、革命的な労働者リーダーに必要不可欠と思われる熱狂的・革命的な本質の特徴、ミヘルス自身の姿勢に近いと見えた<燃えるようなロマン主義>、<徹底した反乱者>バクーニンの本質の特徴を賛美した。」プロレタリアートの闘いは「社会正義のための闘い」でもある。レーリヒは青年ミヘルスにおけるブルードン流の正義観念を指摘している。「社会主義の必然性の認識」のみならず「その必要性の倫理的確信」が必要であるという考えがミヘルスを支配していた。<sup>(29)</sup>ところでこのイタリアの倫理的社會主義には「不幸なドイツ」が対比される。<sup>(30)</sup>

「社会主義者に300万票も投じる国は……政治的にヨーロッパでは最もおけている」とミヘルスは嘆いていた。

1904年イタリアのゼネストはアナルコ・サンジカリズムの終焉の始まりであり、「イタリアのサンディカリズムにはムッソリーニとミヘルスが同じように追求した革命的酵素が欠けている」ことが判明した。<sup>(31)</sup>ミヘルスはイタリアのサンディカリズムに幻滅し、フランスの「革命的サンディカリズム」に希望を託すのだが、そこにも「つのりくる改良主義」<sup>(32)</sup>を認識せざるを得なかった。しかしサンディカリズムの形而上学者ソレルから得た「神話」の観念はミヘルスの思想に長くとどまる。<sup>(33)</sup>1926年に書かれた『反資本主義的大衆運動の心理学』という本で彼は「神話は、社会主義をいつも若々しく攻撃的に保つ唯一の、現実に有効な手段である」と書いている。<sup>(34)</sup>

## 『ミヘルス研究の現状』

「ロベルト・ミヘルスは革命的サンディカリズム運動の真っ直中で、余りに一面的に、プロレタリアートの攻撃性の活性化を目指したストライキ理念を志向していたのだが、ますます、発展する産業社会の内部で、いわゆる制度化によって弛緩した階級前線を止め難いものと認め、……長い間に熟してきた洞察に辿り着くことになった。」<sup>(35)</sup>それが「オリガーキーの鉄則」であり、ミヘルスの「幻滅せる研究」が始まるのである。1907年前後がその境目とされる。

レーリヒによれば、ミヘルスにとってファシズムは新しい春、「復活」を意味した。ムッソリーニはミヘルスにとってイタリアの救済者とみえた。しかしミヘルスの反応はいつも情緒的である、というのがレーリヒの基本テーゼである。ムッソリーニにイデオロギー的に肩入れするミヘルスはファシズムの危機的な時期にもムッソリーニの英雄的行為、その無謬性を宣伝し続けた。1926年のムッソリーニの独裁的地位を固める布告も「支配すべきなのは意志、個人か自覚的な少数者の強力なヴァイタリティーである」<sup>(36)</sup>という公理に合致しているとミヘルスは主張した。

レーリヒの結論はこうである。「革命的階級思想からエリート思想へと進む生涯の仕事の中で権力の＜暴露的弁明＞を追求したミヘルスは、社会主義とサンディカリズムからイタリア民族主義へと辿り着いた。そして彼がムッソリーニと集合体との間に際立たせたような＜神秘的＞関連は、同時にすべての局面での彼自身の政治的アンガージュマンを規定している。彼の変転する信仰告白……は彼の信仰渴望を証言している。新しい正義の理想を追い求める倫理的社会主義者、プロレタリアートの創造的情熱をかきたてようとした一面的なサンディカリスト、ミヘルスは社会主義における信念の消耗を非難し——反民主的なエリート論者として——民主主義が最終的な解消過程に入りこんだと咎めた。この解消過程は新し政治的信念によって克服されねばならない。」<sup>(37)</sup>それがミヘルスのファシズムであった。ロベルト・ミヘルスの「新しい社会秩序の革命的ロマン主義的 추구」の帰結である。

(C) ミッツマンは第一次世界大戦前に教育を受けた3人のドイツ人(デンニース、ゾンバルト、ミヘルス)を共通のユニークな時代体験者として、その得意の精神分析の手法を駆使して分析した本『社会学と疎外』(1973)を書いた。<sup>(38)</sup>3人の疎外感の背景には「伝統的エートスと急速な資本主義発展との不調和」<sup>(39)</sup>が存在する。そのためドイツ中央集権国家には中間階級が育たず、都市的精神は弱かった。ロマン主義的反動と社会主義はそういう疎外からの脱出路であった。ミヘルスに関しては、両者とも「破産した行程」としてたち現われる。

ミッツマンによれば、ミヘルスは「人間の自己自身の行動からの疎外」すなわち党組織——これは目的と手段の倒錯でもある——のみならず、「対象化された文化世界からの疎外」にも気づいていた。3人の反近代主義はニーチェ体験によって強化された。かれらの、「近代社会の邪悪を、社会それ自体に一般的とする傾向」の故に、社会主義が対極に浮かび上がる。

ミッツマンは本書で、第一次大戦勃発までのいわば前期ミヘルスに焦点をあてる。それは3つの時期に分けられる。

(1) (1902—1905) 社会主義の時期で「人間の完全さ、戦争の不正義とその将来的消滅、婦人の権利、ブルジョア社会の殆どの制度の非道徳性、民族自決権へのすべての人々の権利、……社会的不平等を終わらせる手段としての階級闘争という観念」これらが最初期ミヘルスの思想を形成している。ミッツマンはそれを、自然法の存在とその実現への信念と特徴づけている。

(2) (1905—1908および1912) 再検討の時期。自然法から歴史法則と道徳的相対性への移行が行われる。

(3) アカデミズムへの退行。規範的ではない、歴史的、記述的な方法の時期。「道徳の相対的把握、社会発展が自分の個人的道徳に敵対的だとする見方、合理的なものと道徳的なものは敵対的だとする認識」を特徴とする。<sup>(40)</sup>



## 『ミヘルス研究の現状』

続けてミッツマンは、予め数個の抽象的な命題を提示している。

「(1) ミヘルスの個人的価値観の幾つかは、異なるまたは対立さえするこれら三つの時期の見解の共通分母を提供する。(2) ロベルト・ミヘルスの思想に起きた大きな変化のすべては、あらかじめ先行する時期の思想の福次的要素によって準備されている。(3) ミヘルスが服した知的影響は、彼の価値観の新しい理論的枠組みを提供する場合、自分の経験で反故にされた見解を捨てる助けになるという理由のためにのみうけいれられた。(4) 1900—1910年の10年間にミヘルスはコンドルセ流のオプティミズムから全体主義的時代に特徴的な、進歩と理性の拒絶へという変化を遂げた。要するに彼は、18世紀以来の西欧思想の巨大な発展の一つの縮図的な鏡を提供するのである。」<sup>(41)</sup> 若干補充すれば、(1)についてはミヘルスのプロレタリア大衆観、(2)の例としてはサンディカリズムとエリート論の関係、(3)についてはパレート、モスカ、ウェーバーそして(4)については社会ダーウイン主義を考えてみればよいだろう。

ここでは、ミッツマンに独自の分析対象としてミヘルスにおけるプロレタリアート・イメージの変遷を簡単に紹介しておこう。というのも「ミヘルスは自分の倫理的価値観をプロレタリアートへと投影した」と<sup>(42)</sup> されているからである。

ミッツマンはレーリヒと同様にミヘルスにおける「情緒的理想主義」を指摘する。それはミヘルスの主著における、ブルジョア知識人の社会主義支持の動機分析の記述に典型的に示される。「彼らのより直接の動因は、すべての不正に対する高貴なる嫌悪であり、弱い者と貧しい者に対する共感、偉大な理念の実現に対する献身である。」<sup>(43)</sup> 青年ミヘルスは1902年の論文で、「経済闘争史では稀なことだが、プロレタリアートは自己意識を、そして同時に非常な自己犠牲と無私の精神を示した」と書いて、イタリアにおける農業社会主義を称賛した。<sup>(44)</sup> 1906年のドイツ社会民主党を批判した論文でも、「自己自身を意識した力のみが決定的な歴史的力である。しかし、あらゆる自己自身を意識した力の前提条件は自

己犠牲の精神である。……労働者階級の解放を追求する運動は、それが犠牲を計算しそれを恐れ始める時、有効性と存在理由を失う」と語った<sup>(45)</sup>。ミヘルスがプロレタリアートの運動における理想主義を高く評価していることがわかる。ミヘルスにとって社会主義への献身は自己犠牲を意味する。

しかしその後の過程は「幻滅と民主主義・進歩批判」<sup>(46)</sup>の方向を示し、大衆も非道徳性にとらわれていることにも触れるようになる。1905年時点で既にこういう記述が現れる。「美しく誇り高い思想<私は私だ>の、狂気の自慢<私はあなた以上だ>とそれに続く傲慢<私はあなた以上だから、あなたは私の様にならなければならないし、私に服さねばならない>への恐るべき転換、すなわちショーヴィニズムは、今日の世代では、杭のようにあらゆる国の労働者階級の肉にささっている。そして健全な思想をもった博士たちのあらゆる努力もそれを抜き取ることはできない。」<sup>(47)</sup>10年後、理想化されたプロレタリアート像は後退し、社会ダーウイン主義へと接近する。この側面の指摘は恐らくミッツマンが初めてであろう。社会ダーウイン主義は「プロレタリアートに対する憎悪の科学的形式」<sup>(48)</sup>である。ミヘルスは『社会哲学の諸問題』(1913)でこう述べることになる。「自然科学者はプロレタリアートの惨めな立場を淘汰の法則で正当化する。貧者は心理的・精神的・道徳的・身体的に貧弱であるため貧困に相応しいのだ、と。かれらの窮乏は……まさに人類文明の利益にかなうのである。」<sup>(49)</sup>ただこの段階でのミヘルスは事実と正当化とを区別している。即ち、窮乏と劣性との事実関係は認めても自然科学者のように「法則」として正当化する立場にはまだ立っていない。しかし、国際的平和主義からイタリア民族主義と戦争肯定への移行ははっきりしていた。「戦争は非合理的なものだが、その本質においては非道徳的なものではない。少なくとも絶対的にそうなのではない。戦争は不正でありうる。しかし本質においてはそうなのではない。それは正義の使命を達成することさえできる。」<sup>(50)</sup>ミッツマンは、ここに見られた「理性と倫理の分離」<sup>(51)</sup>

## 『ミヘルス研究の現状』

はミヘルスの後のファシズム傾斜に連なると指摘している。

(D) ミッツマンは第一次大戦後のミヘルスの著作にあまり触れていないが発展の一面をよく衝いていた。またレーリヒが政治思想のレベルでミヘルスの思想をとりあげたのに対してミッツマンは社会的・心理的レベルに焦点を当てていた。「ミヘルスの発展は、ミッツマンにとっては、政治的理想主義の精神病理学に属し、それに対してレーリヒにとっては、ソレルとムッソリーニをも生んだ時代に典型的な理性への反逆の一事例である。」<sup>(52)</sup> ビーサムはこのように対比したうえで、両者とも、理想主義的情熱が現実直面して衰弱しファシズムと共産主義と共に再興するという視角では共通であるとする。それに対してビーサムはミヘルスの発展はむしろ一貫しているものであり、問題なのは理想と現実の対立ではなく、現実理解の変化なのであると主張する。それは「アカデミックな社会科学の歴史」の一ケースなのであり、社会主義を墮落させファシズムを正当化したヨーロッパの歴史そのものの一部なのである。

この視点から見ると、ビーサムによれば、サンディカリズム論からエリート論への移行は決してミヘルスの「きまぐれ」などではない。ドイツ社会民主党の墮落（議会主義と組織の自己目的化）批判とオリガーキー論は内的に関連している。即ち「革命的サンディカリストによる議会主義戦術の拒絶とエリート論者による政治的デモクラシーのごまかしの暴露とは密接に関係している。」<sup>(53)</sup> 確かに『政党の社会学』（第6部、第2章）でミヘルスは、オリガーキー（エリート）論はマルクス主義と矛盾しないと主張していた。ビーサムはミヘルスの転向で、即ち社会主義の放棄とエリート論の受容において決定的なのは1907年のイタリア移住とそこでのモスカ、パレートとの出会いだったと考えている。当時のイタリア学界では既にマルクス主義ではなく（1911年クローチェがマルクス主義に「死」を宣告する以前に、それは既に凋落していた）、実証主義的な社会科学と歴史理論における観念論的クローチェ主義が力をもっていた。<sup>(54)</sup> モスカが前者の代表であった。

「ミヘルスがムッソリーニ体制の確信的支持者になったということは疑いを入れ<sup>(55)</sup>ない。」エリート理論は「民主主義の脱幻想化<sup>(56)</sup>」の役割を果たし、ミヘルスはパレートのあとを継ぎ、ファシズム正当化の仕事を引き受け、その指導的役割を果たすことになる。ビーサムはミヘルスによるファシズム正当化を次の二点に要約する。先ずエリート周流による正当化である。ファシズムは社会の再生に必要とされる。「下層・中間階級の人々が支配階級へと上昇することによる人間社会の不断の革新」、これは社会学の法則とされる。この視点から見ると、戦後のイタリアにおける慢性的な政治危機は古い自由主義的な政治階級の取り消せない凋落の結果なのであり、ファシストは「疲弊した、道徳的に墮落した世界を再生させるべく運命づけられた新しい人間」と定義される<sup>(57)</sup>。ビーサムのいう通り、ここで「憲法的合法性の問題は科学的法則の必然性に屈伏する。ファシズムの権力が歴史的で必然的であるだけでなく、事柄の<正常>なコースの一部でもあること<sup>(58)</sup>になる。」第二は民主主義よりも優れたファシズムという正当化である。エリート論に従えば民主主義も一種のオリガーキーなのだが、何か異なった外被をまとう、一種のいかさまなのである。また必要なエリートのリクルートと訓練という点でも非能率で、政策決定も操作と陰謀によってなされる。ファシズムはこれに対して、裏表の無い、はっきりとエリート主義的な体制を公言する。その支配は「率直、明快、具体的、直接的である。エリートは多数決民主主義体制でおなじみの不正な陰謀や<コネ>で自分の仕事をしない。また、不透明、動揺、不決断そして愚かしく味けない妥協の犠牲にも決してならない。そうではなく、エリートは中央権力の独占的統制に自信を持って<sup>(59)</sup>いる。」結局ミヘルスにあっては普遍的法則を追求する社会科学モデルが正当化の道具と化したのである。「ファシズムの権力奪取、そのリーダーへの社会の服従、リーダー支配の永久性、これらすべては<法則>の要求に従うものだから受入れられねばならない」ということ<sup>(60)</sup>になる。ビーサムはこれを社会科学と歴史との誤った対比と批判する。

## 『ミヘルス研究の現状』

もともとエリート論はある特殊の歴史的経験に基づいた限定つきの理論であるのにミヘルスはそれを一般化してしまった。

ところでビーサムはあくまで科学者としてのミヘルスに固執した。それに対してレーリヒ、ミッツマンは感情的位相から極左と極右との心情的共通性を想定していた。ビーサムはそれは誤解であると批判する。

4. さて以上は70年代に発表された主なミヘルス研究の概要とその特徴であるが、最後に80年代に現れたイタリア人の手になる優れたミヘルス研究を紹介しておく。それはフェッラーリスの一連の仕事であり、その後のミヘルス研究を強く喚起するきっかけとなったと考えられるものである。<sup>(61)</sup>ここで取り上げるのはその最初の論文「政治家ロベルト・ミヘルス(1902—1907)」で1982年に発表されたかなり長いものである。ただこれもミッツマンのと同じく、対象が所謂ミヘルスのサンディカリスト時代に限られている。そして彼の一つの狙いはまさにこのミヘルス＝サンディカリスト命題に一定の留保をつけることにある。

フェッラーリスは先ず戦後ミヘルス研究の出発点となったリンスの「余りに有力となった解釈」、即ちミヘルス＝＜主意主義＞説を越えて進む必要性を主張する。確かに70年代の研究（その代表が先の3人であろう）は50年代のそれに比べて非教条的である。この点はフェッラーリスも評価している。

フェッラーリスの述べるところによると、新しい着想はシヴィーニの指摘から得られた。そもそもミヘルス＝サンディカリスト説が真面目に受け取られるようになったのはミヘルス自身の証言があるからである。それは1932年に書かれた自伝的論文「ドイツ社会主義におけるサンディカリズムの底流」で、そこでミヘルスは若きサンディカリスト＝ミヘルスを客観的に描いている。それは信憑性をあたえる。それによれば、ミヘルスは1900年頃からイタリアのサンディカリスト（A.ラブリオーラやE.レオーネ）と親しくまじわり、1904年初めにソレル、ラガルデルらフランスのサンディカリストたちと交渉をもつようになった。そしてこ

う書いている。「彼 [ミヘルス] は、周期的に来るべき社会への準備をさせる演習行動としての、孤立した直接行動とゼネストの神話には一定の距離をとってはいたが、その新しい方向を本質的に支持することに抵抗は無かった。それは、精力的かつ大胆に、マルクスをブルードンやパレートと融合させることで、労働運動における理想とエネルギーのポテンツの復興を追求しようとするものであった。<sup>(62)</sup>」しかしドイツの労働運動にはそれを受けいれる「革命的伝統」が欠けていた。しかしミヘルスは自分たちの運動が無意味であったとは言っていない。この自伝的文書は「当時のフランスやイタリアの労働運動を強く際立たせていたサンディカリズム運動が、ドイツにもいくばくかの軌跡を残しえたこと」の証言である、と彼は末尾に書いている。<sup>(63)</sup> シヴィーニはこの論文にファシストを偽装するミヘルスの作為を感じとった。即ちこの論文は「サンディカリストの経験をファシストの展望の中に復位させる」<sup>(64)</sup> 試みなのである。リンスのミヘルス観もこの文書に出自する。フェッラーリスはこれに対して次の二つの提言をおこなった。(1) ミヘルスの<主意主義>説は支持できない。(2) ミヘルスの「政党分析の発展を通してマルクス主義的  
根本命題が」<sup>(65)</sup> 持続している、これである。フェッラーリスはミヘルスを「ソレル流の革命的サンディカリスト」とか「幻滅した革命的ロマン主義者」(リンス)とするのはステレオタイプであると断ずる。こういうイメージ形成には二つの利害関心が逆説的に合致したとされる。<sup>(63)</sup> 先ずファシストになった晩年のミヘルスが、政治的に戦闘的な青年時代の自画像を労働運動の伝統的な中央派の陣営から放り出し、公式にファシズムの歴史的構成要素と考えられた、「生の哲学」流の非合理主義的文化の中に位置付けし直すというミヘルス意図が一つ。もう一つは、伝統的な中央派の労働運動の政治家や歴史家の利害関心で、彼らは『政党の社会学』を真面目に読まず、それを「外部」からの、「敵」の、ファシストになった一ソレリアンによる批判として片付けたかったのである。両者の利害が一致して「政治的ミリタンテ」というミヘルス像が作られたというわ

## 『ミヘルス研究の現状』

けである。彼はリペーペ<sup>(67)</sup>にならってパオロ・オラーノ文書の慎重な再読を促している。

オラーノ（1875—1945）はもとサンディカリストで後に1919年ファシスト党員となりペルーシア大学の教授を勤めた。いわばムッソリーニやミヘルスと同じ思想的遍歴をたどったように思える人物である。彼はミヘルスの死の直後に出されたペルーシア大学法学部の紀要のミヘルス追悼号（1937年）に「ロベルト・ミヘルス——友，教師，同志」と題する追悼文を書いた。フェッラーリスはこの文章の「慎重な正確さ」に注意を喚起している。オラーノは先ず「彼〔ミヘルス〕が革命的サンディカリズムの運動の支持者であったとはいえない」、たとえ彼が「このイタリア人の勇気ある努力に同意したとしても」と書いているのである。また「1906年10月10日，サンディカリストたちがイタリア社会党から出た時以来，……彼らとロベルト・ミヘルスとの出会いは稀になり，ついには途絶えてしまった」と述べていた。<sup>(68)</sup>

さらに重要なのは、ミヘルス社会学とファシズムとの関係に関するオラーノの注解である。「最近のいくつかの出版物からも推測できるように、ここでこの多産で興味深い著者の思想がドイツ社会学的ではないか、即ち実証主義的で決定論的ではないかどうか問うてみるのが良いだろう。」<sup>(69)</sup>フェッラーリスによれば、もしこの推測が当たっているなら、ミヘルスの社会学は「ファシズムの中に合流する、革命的な文化と政治指導の多くを特徴づける主意主義と直観主義」とは反対の領分に属することになる。

このような問題意識の下でフェッラーリスはミヘルスの処女論文から読み直していく。彼は結論を先取りしてこう主張する。政治家としての青年ミヘルスは何よりも「危機にあるドイツ社会民主党員」、しかも実証主義的マルクス主義（というより「マルクス主義的な実証主義者」の方が相応しいとフェッラーリスはいうのだが）の色彩を色濃く帯びたドイツ社会民主党員であったと断定する。フェッラーリスは『政党の社会

学』の発生史を理解することが、その理論構成を根本から読み直すことにつながると語っている。

80年代に数多く出されたイタリアのミヘルス研究は多かれ少なかれこのフェッラーリスの勧告に従って、自由なとらわれの無い視点からなされ、従来ほとんど無視されてきた側面にも研究の光が当てられ始めている。実際フェッラーリスも取り上げたミヘルスの事実上の処女論文——1901年の『リフォルマ・ソチアーレ』に載った——「ドイツにおける社会問題について」<sup>(70)</sup>は、「現今のドイツを悩ませている社会問題の中で最も重要だが、おそらく最もないがしろにされているのは、疑い無く女性問題である」という象徴的な文章で始まっている。今後のミヘルス研究はミヘルスの経済学、歴史学、フェミニズム等、彼の思想の多面性を視野におさめつつ進められねばならないであろう。

最後にミヘルスの思想的発展における段階区分の問題について若干コメントしておこう。ピーサムからもわかるように、従来は1907年が決定的な年で、革命的サンディカリストからエリート論者に転向したかのようにみられてきた。ミヘルス自身その自伝的文書で、1907年にイタリア社会党を脱党したと書いているし、先のペルージャ大学法学部紀要・ミヘルス追悼号で元同僚のカロロ・クルチオはミヘルスの著作目録をつくり、最初期1901—1907を「社会主義とサンディカリズムの時期」と区分している。しかし最近の研究によればミヘルスは1902年から1909年一杯までイタリア社会党に党籍を置いていたことがわかっている<sup>(71)</sup>。またミヘルスにおけるマルクス主義については、1909年の『イタリア・マルクス主義史』（イタリア語版）への序文でミヘルス自身がこう断言していることを銘記しておこう。「<マルクス主義者>という言葉で、マルクスの多くの個人的ないし理論的誤りをも盲目的にかつ熱狂的に支持する人を指すとする者にとっては、私はそのようなマルクス主義者ではない。しかしこの言葉でいわゆる史的唯物論と階級闘争に関するマルクスの歴史哲学的観念を共有する人、政治の分野では労働者階級と他の社会階級



## 『ミヘルス研究の現状』

とをはっきり区別することが絶対必要であると予知する点でマルクスと一致する人、国家の果たす特別の歴史的役割に関してマルクスの提出した観念に充分同意する人、そして社会問題の解決は生産者自身が生産過程を掌握する以外には無いとするマルクスの意見に与する人の意であるなら、私は紛れもなくマルクス主義者であると自称できる。<sup>(72)</sup>」

今後のミヘルス研究はこの時期区分の問題を含めて再検討の時期に入っているといっても過言ではないであろう。

### 注

- (1) 秋元・森・曾良中編『政治社会学入門』有斐閣選書、10頁参照。
- (2) ジグマンド・ノイマン編、渡辺 一訳『政党—比較政治学的研究』II、みすず書房、1961年、365頁。
- (3) 森孝三訳『政党社会学』大日本文明協会、1913年。後藤新平の序文とシュモラーの書評がついている。この邦訳については、1925年ドイツ語第2版への序文でミヘルス自身が触れている。また1925年（大正14年）には「社会党労働党に関する事實的叙述」の部分が、西村二郎訳『政党心理の研究』（新潮社）として抄訳された。高畠素之が「序」を書いている。
- (4) 例えば、横越英一『政治学体系』勁草書房、1962年、265頁、注20を参照。
- (5) Robert Michels, *Zur Soziologie des Parteiwesens in der modernen demokratie, Untersuchungen über die oligarchischen Tendenzen des Gruppenlebens*, Neudruck der zweiten Auflage, Herausgegeben und mit einem Nachwort versehen von Werner Conze, Alfred Kröner Verlag Stuttgart, 1957; Roberto Michels, *La sociologia del partito politico nella democrazia moderna*, (into di Juan Linz), Bologna, Il Mulino, 1966; Robert Michls, *Political Parties—A Sociological Study of the Oligarchical Tendencies of Modern Democracy*, Introduction by Seymour Martin Lipset, Free Press, N.Y., London, 1962; Robert Michels, *Les partis politiques—Essai sur les tendances oligarchiques des démocraties*, Preface de René Rémond, Flammarion, 1971. ちなみに英語版には、1915—17年頃に書かれた一章「戦時における党生活」（第6部、第3章）が入っている。
- (6) Röhrich, W., *Robert Michels. Vom sozialistisch-syndikalistischen zum faschistischen Credo*, 1972; Mitzman, *Democracy and Estrange-*

- ment. *Three Sociologists of Imperial Germany*, 1973; D. Beetham, "From socialism to Fascism: The Relation between Theory and Practice in the Work of Robert Michels", in, *Political Studies*, No.15: pp.3-24, 161-181, 1977; P. Ferraris, "Roberto Michels politico (1901-1907)", in, *Quaderni dell'Istituto di studi economici e sociali*, [della Facolta di Giurisprudenza di Camerino] 1/1982.
- (7) 森・樋口訳『政党の社会学』木鐸社, I, II, 1973, 1974. 広瀬英彦訳『政党政治の社会学』ダイヤモンド社, 1975. 後者にはドイツ語版第三版へのコンツェの「序文」と「あとがき」が邦訳されている。
- (8) わが国における優れたミヘルス研究論文は次の二つであろう。居安正「寡頭制と民主制」『日本の社会学, 14. 政治』東京大学出版会, 1985年。戦後わが国におけるおそらく初の本格的なミヘルス・オリガーキー研究論文であろう。1962年の論文ながら的確なミヘルス批判もなされ, 現代でもその価値を失わない。新しい比較研究で注目されるのは, 亀島庸一「世紀転換期の大衆社会状況と社会主義——カウツキー, ミヘルス, ベルンシュタイン——」『思想』1985年, 6月。
- (9) アンソロジーは, *Michels. Antologia di scritti sociologici*, a cura di G. Sivini, Bologna, 1980; *Robert Mickels: Masse, Führer, Intellektuelle-Politisch-soziologische Aufsätze 1906-1933*, mit einer Einführung von J. Milles, Campus Verlag, 1987; *Roberto Michels. Potere e Oligarchie. Antologia 1900-1910*. 1989, a cura e con introduzione di E. A. Albertoni. であり, 研究論文集は次の3冊である。 *Roberto Mickels: tra Politica e sociologia*, a cura di B. Furiozzi, 1984; *Atti del Convegno su Robert Michels nel 50 anniversario della morte*. (Trento, 30.5.1986) *Atti di Sociologia/Soziologisches Jahrbuch* 2.1986-I. Università degli studi di Trento; *Roberto Michels: Ecomia Sociologia Politica*, a cura di Riccardo Faucci, 1989.
- (10) cf. David D. Roberts, *The Syndicalist Tradition and Italian Fascism*, 1979; A. James Gregor *Italian Fascism and Developmental Dictatorship*, 1979.
- (11) 「南部問題に関するいくつかの主題」『グラムシ選集』2, 山崎功監修, 合同出版, 1986年, 296頁。
- (12) ミヘルス, 森・樋口訳『政党の社会学』VIII-IX。
- (13) cf. Sergio Amato, "Michels, Kautsky, Weber: Partito Politico e democrazia rappresentativa", in *Roberto Michels: tra politica e sociologia*, p.73, n.22.
- (14) G. Lukács, "Zur Soziologie des Parteiwesens in der modernen

『ミヘルス研究の現状』

- Demokratie (Rezension)”, in *Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung*, Jg. 13, 1928. S.309-315. グラムシ「ロベルト・ミケルスと政党」『グラムシ選集』前掲, 第3巻, 1986, 116-118頁。
- (15) レーニン「イタリアにおける帝国主義と社会主義(覚書)」(1915)。ミヘルスの『イタリア帝国主義』(1914)の書評である。ここでレーニンはミヘルスのあげた事実をフルに活用してはいる。『レーニン全集, 21』大月書店, 1969, 368頁。
- (16) Linz, J.J., “Roberto Michels”, in, D. Shills(ed.), *International Encyclopedia of the Social Science*, vol.10, 1968.
- (17) Furiuzzi, Introduzione a, *Roberto Michels: tra Politica e sociologia*, p.8.
- (18) 178頁。
- (19) R. Faucci, Premessa, in, *Roberto Michels: Economia Sociologia Politica*, p.5-6.
- (20) E. Ripere, “Roberto Michels-oggi, in, *Roberto Michels: Economia Sociologia Politica*, p.7. なおリペーレには『イタリアのエリート主義者』という著書があり, そこでもミヘルスを論じている。cf. E. Ripere, *Gli Elitisti italiani*, 1974.)
- (21) *idem.*, p.13.
- (22) 水田, 上掲, 同所。
- (23) スチュワート・ヒューズ, 生松・荒川訳『意識と社会』みすず書房, 1973年, 第7章「マキアヴェルリの末裔」, 170頁。
- (24) 同上, 184頁。
- (25) その意味でシュモラーの次の評価は興味深い。「従来学界でまったく社会主義的で民主主義的な熱血漢としてその名を知られたミヘルスの本書は, ほとんど彼の別人のような変化を示しているようにみえるが, しかし彼が本書でその過激な過去を否認し去ったと主張するのはおそらく誤りであろう。かれはただ, その従来 of 思想を, 彼が覚醒した歴史的ならびに心理学的理解と結合したにすぎない。」(『政党の社会学』森・訳者あとがき, 545頁に引用)
- (26) Linz, *ibid.*, p.266.
- (27) コンツェもこう書いている。「彼にとって, かつての革命政党は, ブルジョア的政治体制内の競合となった。しかし, こうした厳しい認識も, 社会主義に幻滅した者にとっては, 十分ではなかった。彼はさらに, 社会主義がそもそも実現されることがあるという考えを, 根本的に否定するまでさへなかった。」
- (28) Röhrich, *ibid.*, S.8.

- (29) *ibid.* S.16-17. 初期のイタリア社会主義運動における最初のマルクス主義普及者としてのバクーニンの位置については我が国でも知られるようになった。水田, 164頁。ちなみに「革命的理想主義」ということばをミヘルスはイタリア社会主義におけるバクーニン派の形容として使っていた。Roberto Michels, “Der italienische Sozialismus”, in, *Aus der Waffenkammer des Sozialismus*, semestre IX luglio-dicembre, 1907, S. 17.
- (30) Röhrich, *ibid.* S.19.
- (31) Michels, Les dangers du parti socialiste allemand, in *Le Mouvement Socialiste*, Revue bimensuelle internationale, II serie, VI annee, N.144, 1904, p.193.
- (32) Röhrich, *ibid.* S.38.
- (33) *ibid.* S.46.
- (34) *ibid.* S.45.
- (35) Michels, “Psychologie der antikapitalistischen Massenbewegungen”, in, *Grundrisse der Sozialökonomik*, 9. Abteilung, I. Teil, 1926, S.348.
- (36) Röhrich, *ibid.* S.48.
- (37) “Gedanken über Demokratie und Elite,” in, *Demokratie und Parlamentarismus, Ihre Schwierigkeiten und deren Lösung*, eine Rundfrage der “Prager Presse”, Prag 1926.
- (38) Röhrich, *ibid.* S.175.
- (39) ミッツマンの精神分析的手法は、『鉄の檻』安藤英治訳, 創文社, 1975, におけるウエーバー分析で見事に発揮された。
- (40) Mitzman, *ibid.* p.4.
- (41) *ibid.* p.269-270.
- (42) *ibid.* p.270.
- (43) *ibid.* p.279.
- (44) ミヘルス, 広瀬訳『政党の社会学』, 280頁。
- (45) Michels, “Der italienische Sozialismus auf dem Lande”, in, *Das Freie Wort*, Frankfurter Halbmonatsschrift für Fortschritt auf allen Gebieten des geistigen Lebens, II, n.2, (1902).
- (46) Michels, “Les socialistes allemands et la guerre”, in, *Le Mouvement Socialiste*, Revue bimensuelle internationale, II serie VIII annee, N.171.
- (47) Mitzman, *ibid.* p.282.
- (48) Michels, “Entwicklung und Rasse”, in, *Ethische Kultur*, XIII.

- Jahrgang, N.20, 1905.
- (48) Mitzman, *ibid.* p.322.
- (49) Michels, *Probleme der Sozialphilosophie*, 1914, S.144.
- (50) *ibid.* S.74.
- (51) Mitzman, *ibid.* p.327.
- (52) Beetham, *ibid.* p.4.
- (53) *ibid.* p.16.
- (54) *ibid.* p.20-21.
- (55) *ibid.* p.161.
- (56) *ibid.* p.166.
- (57) Michels, *First Lectures in Political Sociology*, 1974, p.104-5. 本書は *Corso di sociologia politica*, 1927. の英訳である。
- (58) Beetham, *ibid.* p.171.
- (59) Michels, *First Lectures*, p.121.
- (60) Beetham, *ibid.* p.178.
- (61) フェッラーリスには先にあげた以外に次の二つの論文がある。P.Ferraris, “L’influenza di Gaetano Mosca su Roberto Michels”, in, *Quaderni dell’Istituto di studi economici e sociali* [della Facolta di Giurisprudenza di Camerino] 1/1983; “Ancora sul Michels politico attraverso le lettere di K. Kaursky”, in, *Quaderni dell’Istituto di studi economici e sociali* [della Facolta di Giurisprudenza di Camerino] 4/1985.
- (62) Michels, “Eine syndikalistisch gerichtete Unterströmung im deutschen Sozialismus (1903-1907)” (1932), in, *Robert Michels: Masse, Fuehrer, Intellektuelle-Politisch-soziologische Aufsätze 1906-1933*, S.68. この拙訳は『神戸学院法学』第23巻4号におさめられている。
- (63) *ibid.* S.77.
- (64) Sivini, introduzione a, *Michels. Antologia di scritti sociologici*, a cura di G. Sivini, Bologna, 1980, p.9, n.6.
- (65) Ferraris, *ibid.* p.23,27.
- (66) *ibid.* p.55.
- (67) cf. E. Rippe, *Gli elitisti italiani*, 1974, p.446, nota 12.
- (68) Paolo Orano, “Roberto Michels—L’amico, il maestro, il camerata”, in, *Studi in memoria di Roberto Michels*, R. Università degli studi di Perugia, Annali della facolta di giurisprudenza, vol XLIX-1937, V-vol, XV. p.9-10.
- (69) *ibid.* p.10.
- (70) Michels, “Attonrno ad una questione sociale in Germania”, in,

*La Riforma sociale. Rassegna di scienza sociale e politiche*, vol. XI s. II  
a. VIII (1901) 775-794.

- (71) アルベトーニは「エウナウディ財団」に残っているヘミルス関係の膨大な資料——ほとんどは未開拓とのことだが——を調査している。因にルイーダ・エイナウディ（1874-1961）はイタリア共和国初代大統領もつとめた経済学者で、その息子マリーオはミヘルスの娘マノンと結婚している。
- (72) Michels, *Storia del Marxismo in Italia*, 1909, p.7.  
(本稿は「1991年度私学研修福祉社会研修成果」として提出されたものである。)